

2月5日 ルカによる福音書8章4~15節 今日の説教から

説教題：「聞く耳のある者、聞く耳のない者」

私たちの持つ五感は不思議なもので、基本的には視覚や聴覚が働いていてそれによって情報を得ているのですが、要旨裏面下段の記事のように、私たちが共に歩む共同体として信頼を深めるために必要なのは、触覚や嗅覚や味覚なのだそうです。

私たちは、「聞こえていても聞いていない」ことがよくあります。普通の会話の中でも内容が頭に入っていないこともあると思いますし、ましてや「聞きたくもない話」は、私たちの耳を右から左に通る過ぎるものです。もし私たちが御言葉に対して頑なになってしまえば、それは「正しいのは自分だ」「自分を攻撃するその言葉は間違っている」と、神様に向かって反発することになってしまいます。自分を神様よりも正しいと思うことは、偶像崇拜に等しい、最も恐ろしい行いです。そのように頑なにならないためにも、常に自分が間違っているのかもしれないという思いを持ち続けて、相手の話を柔軟に受け止めようとする必要があります。そうしない限り、私たちはイエス様の言葉に対して「耳が聞こえない人」になってしまうのです。目が開いていても「見えていないかもしれない」、耳が聞こえていても「ちゃんと聞こえていないかもしれない」。私たちは、特に御言葉に対してはそのように謙虚かつ慎重になる必要があるのです。

実際に、今日イエス様が最初に群衆に対して語った言葉だけを聞いても、それが理解できる人は少数でしょう。イエス様が神の子であると、救い主であると理解していない人々には、「種は神の言葉である。良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである」ということを理解できないのです。

むしろ、言葉の真意が理解できたとしても、イエス様を拒絶する人々にとっては、それは「拒絶すべき言葉」として理解され、彼らの中に入って行かないのです。「この人の言葉だから受け入れられない」という、何よりも自分の基準を最優先するその行動は、私たちが正しさから遠ざけてしまいます。それと同時に、イエス様との豊かな交わりからも自分から遠ざかってしまうのです。

普段であれば、私たちは聖書の朗読や讃美歌を通じて耳から福音を聞き、聖書を読むことによって目から福音を読むことになります。しかし今日はそれだけではなく、聖餐式によって、私たちは五感を全て用いて、イエス様のことを実感することになります。聖書を読み、制定の言葉を耳にして、パンを味わい、ぶどう酒の香りに思いを馳せ、それらを受け取る手触りをかみしめる。それによって、確かに今私たちが聖餐に与れている喜びを、イエス様の兄弟姉妹として招かれている喜びを実感するのです。だからこそ私たちは、聖餐に与るうえで気を付けなければいけません。自分が聖餐を受けるにふさわしいのかどうか、ふさわしくないとすれば、それでも招いてくれる神様の愛と寛容さはどれほど深いものなのか。頂くパンは、葡萄酒は、私たちにどういう意味を持つのか、その血を流した時のイエス様は、十字架にかかった時のイエス様は、どれほど私たちのことを愛してくれていたのか。それを、「当たり前を受け取る」のではなく、いつもしっかりと考えながら、喜びの中で受け取ることが出来るのであれば、私たちはまた一つ神様に浄められた歩み続けることが出来るのです。

今日の御言葉を通じて、聖餐のパンとぶどう酒を通じて、私たちはまた学びと信仰を強めることが出来ます。その喜びを胸に、今週一週間の歩みを、これからの歩みを、共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：ルカによる福音書 8 章 4～15 節

- 4:大勢の群衆が集まり、方々の町から人々がそばに来たので、イエスはたとえを用いてお話しになった。「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。ほかの種は石地に落ち、芽は出たが、水気がないので枯れてしまった。ほかの種は茨の中に落ち、茨も一緒に伸びて、押しつぶさってしまった。また、ほかの種は良い土地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。」イエスはこのように話して、「聞く耳のある者は聞きなさい」と大声で言われた。弟子たちは、このたとえはどんな意味かと尋ねた。イエスは言われた。「あなたがたには神の国の秘密を悟ることが許されているが、他の人々にはたとえを用いて話すのだ。それは、／『彼らが見ても見えず、／聞いても理解できない』／ようになるためである。」
- 11:「このたとえの意味はこうである。種は神の言葉である。道端のものとは、御言葉を聞くが、信じて救われることのないように、後から悪魔が来て、その心から御言葉を奪い去る人たちである。石地のものとは、御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根がないので、しばらくは信じて、試練に遭うと身を引いてしまう人たちのことである。そして、茨の中に落ちたのは、御言葉を聞くが、途中で人生の思い煩いや富や快樂に覆いふさがれて、実が熟するまでに至らない人たちである。良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである。」

朝日新聞「科学季評」より抜粋（2021年8月6日朝刊、京都大学前総長・山極寿一著）

人間を含むサルや類人猿といった霊長類は、視覚優位の世界認識を持っている。視覚は五感のうちでまず物事を理解するのに用いられ、他者とたやすく共有できるからだ。次に、聴覚、臭覚、味覚、触覚の順に共有度が下がる。変な音が聞こえたり、匂いがしたりすると、見て確かめてみたくなるのはその表れだ。それは霊長類の祖先が樹上で暮らし、夜から昼の世界に進出した時に、鳥と同じような立体視と色彩を感知する能力を身に付けたことによる。言葉はまず視覚に対応するようになっている。形や色の表現が多彩なのも視覚に基づくからだ。しかし、面白いことに信頼を高める五感は逆で、触覚や味覚、臭覚といった他者と共有しにくい感覚が重要になる。それは他者と直接接触し合い、近接して身体を共鳴させたときに味わう感覚で、身体がつながったような気持ちになるからだろうと思う。逆説的に言えば、他者と共有しにくいからこそ、相手の気持ちを感じようという心の動きが生まれるのではないだろうか。言葉もその感覚を伝える。ざらざら、すべすべ、べっとり、甘ったるい、つんと来る、などの表現も多彩だ。しかし、これらの言葉は実際に体験してみないと腑に落ちないことが多いし、「卵の腐ったような臭い」などと実際の現象を例にとることも多くなる。それは、他者も同じように感じているかどうかを確かめることが難しいからである。でも、親密な人間関係を保つためには、視覚や視覚以上にこれら三つの感覚を共有することが重要になる。共に暮らす上で、身体と心を共鳴させることが不可欠になるからである。